

件が多いが、これもここ20年来の規制緩和の弊害ではないかと評者は思うのである。

第三章以下、詳しく紹介する余裕はないが、「深まらない安全保障議論と憲法」、「東京首都圏一極集中という危機」、「先進各国に大きく遅れを取るインフラ環境」、「壊れていく日本語」、「日本を弱くした選挙制度」、「揺らぐ日本の土地所有」、「公務員制度の危機」、「崩壊してゆく子供たち」、「人生100年時代の制度設計」というテーマでいずれをとっても今の日本で問題となっている、あるいは問題となるべき、重要テーマにつき論じている。

今度のこの書は、かねてから著者の持論であるインフラ整備促進論を抑制して全11章のうちのわずか1章としているが、著者の見識が広範囲にわたり、その主張も各分野で核心をついていることから結果としてインフラ促進論も説得力を増している。

本書は日本人に対する警世の書である。全建会員のみならず、そして建設界のみならず広く江湖に読者を求め著者の危機意識を広く共有してほしいと思うものである。

**危ない日本の危機感の危機**

大石久和  
Hisakazu Oishi

われわれが気づけば、豊かさは取り戻せる!

ここ20年で……  
日本人の平均所得は約120万円減少!  
GDPの世界シェアも18%→6%!

「失われた20年」は、われわれ日本人の誤った選択の結果だった!

海竜社 定価 [本体1600円]+税

出版社：海竜社 定価：1,600円+税  
刊行：2017年9月

## Dr.クマの“健康のヒント”

### 薬剤耐性



前回述べた結核は薬剤耐性が問題になっている。結核菌をはじめとする細菌感染の治療には抗菌薬が使われるが、それが効かない細菌が増えているのだ。細菌はものすごい勢いで繁殖する。大腸菌やコレラ菌などは大体20分から30分で細胞分裂し2倍になる。結核菌は15時間程度かかるので遅い部類ではあるが、それでも倍々ゲームで増えていく。その細菌に対して抗菌薬はそれぞれのメカニズムで対抗するのだ。しかし細菌は分裂するたびに遺伝子変異を起こしている。たくさんの遺伝子変異があれば、抗菌薬が効かないタイプの変異がその中に含まれるチャンスが増える。そのような変異のある細菌が耐性菌であり、クスリを使っても体内で生き残り、

分裂を続けていくことになる。つまり、抗菌薬が使われる時間が長いほど耐性菌はできやすくなる。結核に関しては標準的な薬物療法があるものの、長い年月の間に耐性菌が増え、治療が難しくなっている。また、結核菌の分裂速度は遅く、治療にも長い時間がかかるため、途中で治療をやめる人もあることが世界的な耐性菌の増加につながっているとも言われている。解決法は指示通りに薬物治療を受けることである。風邪などでウイルスに効かない抗生物質をもらわないことも重要だ。私もよく処方求められるが丁重にお断りしている。結核以外でも耐性菌は増えているのだから。

(北里大学医学部 教授 熊谷 雄治)